

ナルシシスティックリアクタンス理論の検討 (2)

深田博己・神谷真由美・疋田容子・樋口匡貴

An examination of the narcissistic reactance theory of sex coercion (2)

Hiromi Fukada, Mayumi Koya, Yoko Hikita, and Masataka Higuchi

本研究の目的はナルシシスティックリアクタンス理論の有効性を実験的に検討することである。山香・深田(2006)の方法論的問題点を改善した上で、ナルシシズム状況(ナルシシスティック状況、通常状況)とナルシシズム特性(高群、中群、低群)を独立変数とする2要因実験参加者間計画に基づく質問紙実験を実施した。実験参加者は189名の男子大学生であった。実験参加者は、女性に対して男性が性的強要を行う場面を描写したシナリオを、男性の立場に立って読み、後の質問に回答した。通常状況に比べ、ナルシシスティック状況は、リアクタンス喚起の指標である主観的反応(禁止された行動の魅力、女性に対する敵意、自己支配感)と自由回復行動意図(自由の行使意図、女性への攻撃意図)を増加させることが見出され、ナルシシスティックリアクタンス理論を支持した。これに対して、ナルシシズム特性は、理論と矛盾する結果を示した。

キーワード：ナルシシスティックリアクタンス理論、ナルシシズム状況、ナルシシズム特性、リアクタンス喚起

問 題

1. ナルシシスティックリアクタンス理論

性的強要は、被害者にとっては身体的にも精神的にも深く傷つく極めて深刻な問題である。Baumeister, Catanese, & Wallace (2002)は、これまでの性的強要の事例を検討した結果、このような行動を起こしやすい男性の特徴や状況を説明するナルシシスティックリアクタンス理論(narcissistic reactance theory)を提唱した。ナルシシスティックリアクタンス理論とは、女性に対する男性の性的強要をナルシシズム(American Psychiatric Association, 1994 高橋他訳 1995)とリアクタンス理論(Brehm, 1966)の組み合わせによって説明する理論である。しかし、この理論を検討した先行研究は、海外ではBushman, Bonacci, van Dijk, & Baumeister (2003)の研究の1例と、日本では山香・深田(2006)の研究の1例のみであり、理論の有効性はまだ十分に検討されていない。ナルシシスティックリアクタンス理論の概要に関しては、山香・深田(2006)が紹介

している。

本研究は、ナルシズムに直接関係するナルシズム特性要因とナルシズム状況要因を取り上げ、女性に対する男性の性的強要事態において、これらの要因が果たす役割を検討することによって、ナルシスティックリアクタンス理論の有効性を検証する。

2. ナルシスティックリアクタンス理論を検討した先行研究

(1) Bushman et al. (2003) の研究

男子大学生を対象にした Bushman et al. (2003) は、3つの研究によってナルシスティックリアクタンス理論の検討を行った。研究1から、ナルシズム特性が高い実験参加者ほど、レイプ神話を容認し、レイプ被害者に対する共感の低いことが、研究2から、ナルシズム特性の高い男性は、女性が愛情行動に応えることで男性の性的欲求を助長しているように感じる場合、男性による性的強要行為を受容しやすく、男性を責める傾向が低いことが、研究3から、ナルシズム特性の高い男性は、女性に対する魅力を低く、男性の攻撃を高く評価することが見出された。これらの結果は、ナルシスティックリアクタンス理論を支持するものであった。

(2) 山香・深田 (2006) の研究

ナルシスティックリアクタンス理論では、ナルシズムは、ナルシズム的行動の生じやすさに関係する性格特性としてのナルシズム特性と、ナルシズム的行動の生じやすさに関係する状況としてのナルシズム状況の2つの側面を含むと想定されている。しかし、Bushman et al. (2003) の研究では、ナルシズム特性しか扱っておらず、ナルシズム状況も、リアクタンスの喚起のしやすさに関係する性格特性としてのリアクタンス特性も検討されていない。そこで、山香・深田 (2006) は、大学生男女を対象とし、ナルシズム特性 (低群・中群・高群) ×リアクタンス特性 (低群・中群・高群) ×ナルシズム状況 (ナルシスティック状況条件・通常状況条件) の3要因実験参加者間計画を採用し、ナルシスティックリアクタンス理論を検討した。その際、性的強要行為の場面設定をシナリオの中で行う質問紙実験法を用いた。シナリオの内容は、ある男性が恋人の女性とセックスを望むが、女性に拒否され、セックスをあきらめるというものであった。3つの要因のうち、ナルシズム特性とリアクタンス特性は、実験参加者の特性を測定し、ナルシズム状況は、シナリオの男性の状況を操作した。つまり、ナルシスティック状況条件では、シナリオの男性はより成功しており、恋愛にのぼせ上がっており、アルコールに酔っていると描写した。一方、通常状況条件では、シナリオの男性は成功しておらず、恋愛にのぼせ上がっておらず、アルコールに酔っていないと描写した。

実験参加者に、ナルシスティック状況条件あるいは通常状況条件のシナリオと条件共通の質問紙をセットにした小冊子を配付し、シナリオの男性と女性に対する実験参加者の印象を測定した。その結果、ナルシズム状況の主効果のみ見られ、加害者である男性に対する印象も被害者である女性に対する印象も、通常状況条件よりもナルシスティック状況条件の方が良い印象となることが判明した。このように、男性に対する印象と女性に対する印象は矛盾する結果を示していた。

3. 山香・深田 (2006) の研究の問題点

(1) シナリオにおける男性の性的強要行動の描写内容

ナルシシスティックリアクタンス理論は、男性が女性とセックスをしたいと望み、女性がそれを拒否した場合、リアクタンスはセックスを押し進める衝動を引き起こし、ナルシズムは女性が拒否した時点でのリアクタンスの感じやすさを増加させ、強制的な暴力を行う傾向を増加させると仮定する。したがって、理論を適切に検討するためには、性的強要の継続を望む男性が女性からセックスを拒否される状況を設定する必要がある。しかし、山香・深田（2006）では、男性が恋人の女性からセックスを拒否され、男性がセックスをあきらめるというシナリオを読ませ、シナリオの登場人物である男性と女性の印象について回答させている。すなわち、男性の性的強要行動が女性の拒否によって消滅する状況を描写しているため、女性が拒否をすれば男性が性的強要の継続を断念するという特殊な事例を取り上げていたことになる。ナルシシスティックリアクタンス理論が扱う性的強要は、その後に男性が強制的な暴力行為へと行動をエスカレートさせる可能性を想定している。そうした意味で、女性の拒否によって男性が性的強要をあきらめるという山香・深田（2006）のシナリオ内容は不適切であると判断できる。

したがって、本研究では、女性の拒否によって男性が性的強要を断念するのではなく、女性の拒否にもかかわらず男性が性的強要を継続する含みを持たせた描写へと、シナリオ内容を修正する。ただし、倫理的な制約から、男性の性的強要の描写内容が露骨になり過ぎないように、読み手である実験参加者の想像に委ねる要素を持たせた描写にする必要があることは言うまでもないことである。

（2）実験参加者の性

ナルシシスティックリアクタンス理論は、女性に対する男性の性的強要を説明するための理論である。理論の検証には、男性の実験参加者のデータが重要である。しかし、山香・深田（2006）の実験には、男性だけでなく女性の実験参加者も含まれており、しかも、男性実験参加者のデータと女性実験参加者のデータが込みにして分析されているため、男性実験参加者に関する結果のみを抽出することは不可能である。男性実験参加者が同性である男性加害者の性的強要と異性である女性被害者の拒否をどのように評価するかということと、女性実験参加者が異性である男性加害者の性的強要と同性である女性被害者の拒否をどのように評価するかということは、おのずから異なるはずである。

したがって、本研究では、実験参加者を男性に限定することによって、女性に対する男性の性的強要を男性実験参加者がどのように評価するのか、また、そうした評価がナルシズムに直接関係する要因（ナルシズム状況とナルシズム特性）によってどのような影響を受けるのかを厳密に検討したい。

（3）リアクタンス反応測度

先に述べたように、ナルシシスティックリアクタンス理論は、男性が女性とセックスをしたいと望み、女性がそれを拒否した場合、リアクタンスはセックスを押し進める衝動を引き起こし、ナルシズムは女性が拒否した時点でのリアクタンスの感じやすさを増加させ、強制的な暴力を行う傾向を増加させると仮定する。そのため、理論の有効性を検討するためには、性的強要の継続を望む男性が女性からセックスを拒否された場合の、男性のリアクタンスを測定し、確認する必要がある。

しかし、山香・深田（2006）では、性的強要をした男性と拒否をした女性に対する一般的な対人印象のみが測定されており、リアクタンスに関係する反応は全く測定されていなかった。

したがって、本研究では、リアクタンス理論の研究（今城，2002）で多用される主観的反応（禁止された行動の魅力，敵意，自己支配感）と自由回復行動意図（自由の行使意図，攻撃意図）をリアクタンス喚起の測度として測定する。

従属変数に関しては、リアクタンスに加え、女性への共感を測定する。これは、ナルシシストの特徴として、共感の欠如があげられている（American Psychiatric Association 1994 高橋他訳 1995）ためである。また、ナルシシストは高揚した自己価値を維持するために、認知的歪みを利用して不当な行動を正当化する。すなわち、レイプ被害者が本当はセックスを望んでいた、またはある程度の同意を表していたと考える（Bushman et al., 2003）。このように、ナルシシストは、レイプ被害者に対して共感的ではないと考えられるので、シナリオの女性に対する共感を測定する。

3. 本研究の目的と仮説

先行研究の方法論的問題点を改善した上で、本研究では、女性に対する男性の性的強要が女性に拒否されるという性的強要事態において、男性に喚起されるリアクタンスに及ぼす男性側のナルシシズム特性とナルシシズム状況の効果を検討することによって、ナルシシスティックリアクタンス理論の有効性を検討することを目的とする。

なお、本研究では、シナリオを利用した質問紙実験を行うが、シナリオの登場人物である男性の感情に実験参加者の感情を投影させることによって、性的強要事態での男性の反応と、男性の恋人である女性に対する男性の反応を測定する。本研究の仮説は、次の通りである。

仮説 1：リアクタンスに関しては、ナルシシスティック状況条件でナルシシズム特性が高い実験参加者が最もリアクタンスを喚起しやすく、逆に、通常状況条件でナルシシズム特性が低い実験参加者は最もリアクタンスを喚起しにくいであろう。

仮説 2：女性への共感に関しては、ナルシシスティック状況条件でナルシシズム特性が高い実験参加者が最も女性に共感的ではなく、逆に、通常状況条件でナルシシズム特性が低い実験参加者は最も女性に共感的であろう。

方 法

1. 実験計画と実験参加者

実験計画は、ナルシシズム状況（ナルシシスティック状況条件・通常状況条件）×ナルシシズム特性（低群・中群・高群）の2要因実験参加者間計画を採用した。

実験参加者は、男子大学生 189 名（平均年齢 21.63 歳， $SD=2.04$ ）であり、ナルシシスティック状況条件 97 名（平均年齢 21.48 歳， $SD=1.68$ ），通常状況条件 92 名（平均年齢 21.79 歳， $SD=2.36$ ）であった。

2. ナルシシズム特性測定尺度

実験参加者のナルシシズム特性を、小塩（1998）の自己愛人格目録短縮版（全 30 項目）を用いて測定した。回答は、「全く当てはまらない」（1 点）から「とてもよく当てはまる」（5 点）の 5 段

階で求めた。得点幅は 30～150 点、平均は 91.18、標準偏差は 16.46 であった。平均±0.5SD を基準として、実験参加者を低群、中群、高群に分類した。すなわち、平均-0.5 標準偏差以下（～82.95 点）を低群（50～82 点）、平均+0.5 標準偏差以上（99.41 点～）を高群（100～145 点）、その中間を中群（83～99 点）とした。各群の実験参加者数は、低群 56 名、中群 77 名、高群 56 名であった。実験参加者に関するナルシズム状況条件とナルシズム特性群のクロス集計表を表 1 に示す。

表 1. ナルシズム状況条件とナルシズム特性群のクロス表

	ナルシズム状況	ナルシズム特性			合計
		低群	中群	高群	
	ナルシスティック状況条件	33	31	33	97
	通常状況条件	23	46	23	92
	合計	56	77	56	189

3. 手続き

本研究では、シナリオと質問紙をセットにした小冊子を用い、場面想定法により性的強要場面を設定し、回答を求める質問紙実験を実施した。性的強要の場面設定とナルシズム状況の操作は、投影法的視点から小冊子中のシナリオで行い、ナルシズム特性は実験参加者自身の特性を測定した。実験参加者に、ナルシスティック状況条件あるいは通常状況条件のシナリオを含む小冊子を無作為に配付した。「男子大学生の恋愛に関する調査」と題する小冊子の構成は、1 ページ目が実験の教示などを記載した表紙、2 ページ目が白紙、3 ページ目と 4 ページ目がナルシズム特性の測定、5 ページ目がシナリオの提示、6 ページ目がナルシズム状況の操作チェック、7 ページ目と 8 ページ目が従属変数の測定、9 ページ目がフェース項目（性別と年齢）であった。

小冊子には性的な内容を含むため、シナリオを読む段階、回答する段階で実験参加者に不快感や嫌悪感を与える恐れがある。よってその場合には直ちに回答を中止するように、実験参加者に伝えた。実験参加者には本研究を調査として紹介し、協力を求めた。調査（実験）は強制ではなく自由意思であり、質問への回答を拒否することができるということも実験参加者に伝えた上で、協力への同意が得られた者に対してのみ実験を実施した。

3. 実験材料

シナリオは、ある男性（A くん）が、恋人の女性（B さん）からセックスを拒否されるという内容で、実験参加者には、男性の立場にたってシナリオを読むように教示を与えた。また、シナリオの男性の成功、恋愛におけるのぼせあがり、アルコールによる酔いでナルシズム状況を操作した。ナルシスティック状況条件では、シナリオの男性は成功しており、恋愛にのぼせあがっており、アルコールに酔っていると描写した。一方、通常状況条件では、シナリオの男性は、成功しておらず、恋愛にのぼせあがっておらず、アルコールに酔っていないと描写した（補助資料参照）。

4. 従属変数

従属変数は、シナリオの男性のリアクタンスと、シナリオの女性への共感であった。またナルシシズム状況の操作チェックのため、シナリオの男性の各情報要素（職業的成功、恋愛におけるのびせあがり、アルコールによる酔い）に対する認知を測定した。

(1) リアクタンス

今城（2002）を参考に、以下の7種類の従属変数を測定した。回答の際、シナリオの男性（Aくん）の立場にたって回答するように教示した。

禁止された行動の魅力：「Aくんは、Bさんとセックスをしたくなる気持ちが強くなると思いますか」「Aくんは、Bさんとのセックスをより魅力的に感じると思いますか」の2項目（ $\alpha=.52$ ）の平均を禁止された行動の魅力得点とした。回答は、「全くそう思わない」（1点）から「とてもそう思う」（7点）までの7段階で求めた。

敵意：「Aくんは、Bさんの態度に対して腹が立つと思いますか」「Aくんは、Bさんの態度に反感を覚えると思いますか」「Aくんは、Bさんの態度に対してイライラしていると思いますか」「Aくんは、Bさんの態度に反発を感じると思いますか」「Aくんは、Bさんに敵意を感じると思いますか」の5項目（ $\alpha=.87$ ）の平均を敵意得点とした。回答は、「全くそう思わない」（1点）から「とてもそう思う」（7点）までの7段階で求めた。

自己支配感：「Aくんは、自分にはセックスをするかしないか決める自由があると感じていると思いますか」の1項目を自己支配感得点とした。回答は、「全くそう思わない」（1点）から「とてもそう思う」（7点）までの7段階で求めた。

自由の行使意図：「Aくんは、この後もセックスを続けようと思いますか」「Aくんはこの後、Bさんとのセックスをあきらめようと思いますか（逆転項目）」の2項目（ $\alpha=.72$ ）の平均を自由の行使意図得点とした。回答は、「全くそう思わない」（1点）から「とてもそう思う」（7点）までの7段階で求めた。

攻撃意図：「Aくんはこの後、Bさんを非難しようと思いますか」「Aくんはこの後、Bさんに暴力をふるおうと思いますか」の2項目（ $\alpha=.73$ ）の平均を攻撃意図得点とした。回答は、「全くそう思わない」（1点）から「とてもそう思う」（7点）までの7段階で求めた。

主観的反応：禁止された行動の魅力（2項目）、敵意（5項目）、自己支配感（1項目）の8項目（ $\alpha=.80$ ）の平均を主観的反応得点とした。

自由回復行動意図：自由の行使意図（2項目）、攻撃意図（2項目）の4項目（ $\alpha=.69$ ）の平均を自由回復行動得点とした。

分析にあたっては得点が高い方が、リアクタンスが喚起されていることを示すため、一部の得点を逆転させた。

(2) 女性への共感

Aくんの立場にたって、恋人の女性（Bさん）に対してどのように感じたか回答するように教示した。「Bさんは、本当にAくんとのセックスを嫌がっていると思いますか」「Bさんは、本当はセックスを望んでいると思いますか（逆転項目）」「このような状況で、Bさんがセックスを拒否するのは、当然だと思いますか」「このような状況で、Bさんがセックスを拒否するのは、間違っている

としますか(逆転項目)」の4項目($\alpha=.61$)の平均を女性への共感得点とした。回答は、「全くそう思わない」(1点)から「とてもそう思う」(7点)までの7段階で求めた。分析にあたっては、得点が高い方が女性への共感が高いことを示すため、一部の得点を逆転させた。

(3) ナルシシズム状況操作のチェック

ナルシシズム状況操作の成否を確認するために、シナリオの男性に対する実験参加者の認知を測定した。

職業的成功：「Aくんは最近どの程度学業面で成功していますか」「Aくんは、最近どの程度部活で成功していますか」と尋ね、「とても成功している」(1点)から「全く成功していない」(7点)までの7段階で回答を求めた。

恋愛におけるのぼせあがり：「Aくんはどの程度恋人がいる状況にのぼせていますか」と尋ね、「とてものぼせている」(1点)から「全くのぼせていない」(7点)までの7段階で回答を求めた。

アルコールによる酔い：「Aくんはどの程度お酒に酔っていますか」と尋ね、「とても酔っている」(1点)から「全く酔っていない」(7点)までの7段階で回答を求めた。

シナリオの想像のしやすさ：「文章で描写された場面を、どのくらいリアルに想像できましたか」と尋ね、「とてもよく想像できた」(1点)から「全く想像できなかった」(7点)までの7段階で回答を求めた。

分析にあたっては、一般的な考えやすさから、得点の高い方が、より成功しており、のぼせ上がっており、アルコールに酔っており、想像しやすいとするため、全ての得点を逆転させた。

結 果

1. ナルシシズム状況操作のチェック

シナリオによるナルシシズム状況操作の成否を確認するために、操作要因の情報要素である職業的成功(学業での成功、部活動での成功)、恋愛におけるのぼせあがり、アルコールによる酔いに関して、ナルシシスティック状況条件と通常状況条件の差を t 検定によって検討した。また、同様に文章の想像のしやすさに関して、ナルシシスティック状況条件と通常状況条件の差を t 検定によって検討した。 t 検定の結果を表2に示す。表中では、より得点の高い方が、成功しており、のぼせあがっており、酔っており、想像しやすいことを示す。

t 検定の結果、職業的成功(学業での成功、部活動での成功)、恋愛におけるのぼせあがり、アルコールによる酔いの全ての情報要素において、条件間に有意差が見られ、ナルシシスティック状況条件のシナリオの男性の方がより成功しており、のぼせあがっており、酔っていると認知された。これにより、シナリオによるナルシシズム状況の操作は有効であったことが示された。また、文章の想像のしやすさに関しては、条件間に有意差は見られず、どちらの条件においてもシナリオは想像しやすいと評定された。

2. リアクタンス

リアクタンスに関連する各従属変数の平均と標準偏差をナルシシズム状況別、ナルシシズム特性

表 2. 各従属変数に関するナルシズム状況条件間の検定結果

従属変数	平均 (標準偏差)		t 値
	ナルシスティック 状況条件	通常状況条件	
学業での成功 ($df=187$)	5.56 (1.30)	4.39 (1.08)	6.69 $p<.01$
部活動での成功 ($df=187$)	5.24 (1.36)	4.30 (1.13)	5.12 $p<.01$
恋愛におけるのぼせあがり ($df=187$)	6.31 (1.07)	5.27 (1.21)	6.23 $p<.01$
アルコールによる酔い ($df=187$)	5.85 (1.47)	3.29 (1.85)	10.5 $p<.01$
シナリオの想像のしやすさ ($df=186$)	5.64 (1.29)	5.51 (1.35)	0.69 <i>ns</i>

別に示したのが表 3-1 から表 3-7 である。各従属変数に関して、ナルシズム状況（ナルシスティック状況条件・通常状況条件）×ナルシズム特性（低群・中群・高群）の 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果は表 4 に示す。

(1) 個別のリアクタンス変数の結果

禁止された行動の魅力：禁止された行動の魅力に関しては、ナルシズム状況の主効果、ナルシズム特性の主効果、ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用のどの効果も有意ではなかった。なお、ナルシズム状況の主効果は有意傾向を示し、ナルシスティック状況条件 ($M=4.21$) の方が通常状況条件 ($M=3.80$) よりも禁止された行動の魅力得点は高い傾向にあった。

敵意：敵意に関しては、ナルシズム状況の主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=4.17$) の方が通常状況条件 ($M=3.82$) よりも敵意得点は高かった。また、ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用が有意であった。単純主効果の検定の結果、通常状況条件でナルシズム特性の単純主効果が有意であり、多重比較 (Tukey の HSD 法、有意水準を 5% に設定、以下同様) の結果、ナルシズム特性高群 ($M=4.31$) の方が低群 ($M=3.22$) よりも敵意得点は高かった。また、ナルシズム特性低群でナルシズム状況の単純主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=4.28$) の方が通常状況条件 ($M=3.22$) よりも敵意得点は高かった。

自己支配感：自己支配感に関しては、ナルシズム特性の主効果が有意であったので、多重比較を行ったところ、3 群間の差はいずれも有意でなかった。また、ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用が有意であった。通常状況条件でナルシズム特性の単純主効果が有意であり、多重比較の結果、ナルシズム特性中群 ($M=4.33$) と高群 ($M=5.09$) が低群 ($M=3.26$) よりも自己支配感得点は高かった。ナルシズム特性低群・中群・高群の 3 群いずれにおいてもナルシズム状況の単純主効果が有意であった。ナルシズム特性低群では、ナルシスティック状況条件 ($M=4.55$) の方が通常状況条件 ($M=3.26$) よりも自己支配感得点は高かった。ナルシズム特性中群でも、ナルシスティック状況条件 ($M=5.10$) の方が通常状況条件 ($M=4.33$) よりも自己支配感得点は高かった。しかし、ナルシズム特性高群では、通常状況条件 ($M=5.09$) の方がナルシスティック状況条件 ($M=4.21$) よりも自己支配感得点は高かった。なお、ナルシズム状況の主

効果は有意傾向を示し、ナルシスティック状況条件 ($M=4.21$) の方が通常状況条件 ($M=3.80$) よりも自己支配感得点は高い傾向にあった。

自由の行使意図：自由の行使意図に関しては、ナルシズム状況の主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=4.72$) の方が通常状況条件 ($M=3.93$) よりも自由の行使意図得点は高かった。

攻撃意図：攻撃意図に関しては、ナルシズム状況の主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=3.39$) の方が通常状況条件 ($M=2.79$) よりも攻撃意図得点は高かった。また、ナルシズム特性の主効果 ($F(2,183) = 4.76, p < .05$) が有意であったので、多重比較を行ったところ、ナルシズム特性中群 ($M=3.32$) の方が高群 ($M=2.67$) よりも攻撃意図得点は高かった。

(2) 合成したリアクタンス変数の結果

主観的反応：主観的反応に関しては、ナルシズム状況の主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=4.23$) の方が通常状況条件 ($M=3.87$) よりも主観的反応得点は高かった。また、ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用が有意であった。通常状況条件でナルシズム特性の単純主効果が有意であり、多重比較の結果、ナルシズム特性高群 ($M=4.36$) の方が低群 ($M=3.31$) よりも主観的反応得点は高かった。また、ナルシズム特性低群と中群でナルシズム状況の単純主効果が有意であり、ナルシズム特性低群では、ナルシスティック状況条件 ($M=4.25$) の方が通常状況条件 ($M=3.31$) よりも主観的反応得点は高く、ナルシズム特性中群でも、ナルシスティック状況条件 ($M=4.45$) の方が通常状況条件 ($M=3.90$) よりも主観的反応得点は高かった。

自由回復行動意図：自由回復行動意図に関しては、ナルシズム状況の主効果が有意であり、ナルシスティック状況条件 ($M=4.05$) の方が通常状況条件 ($M=3.36$) よりも自由回復行動意図得点は高かった。

3. 女性への共感

女性への共感の平均と標準偏差をナルシズム状況別、ナルシズム特性別に示したのが表 5 である。リアクタンスと同様に、ナルシズム状況 (ナルシスティック状況条件・通常状況条件) ×ナルシズム特性 (低群・中群・高群) の 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果は、リアクタンスの結果と併せ、表 4 に示す。女性への共感については、ナルシズム状況の主効果、ナルシズム特性の主効果、ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用のいずれの効果も有意ではなかった。

表 3-1. 禁止された行動の魅力:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.02 (1.36)	4.19 (1.17)	4.41 (1.39)	4.21 (1.31)
通常状況条件	3.57 (1.45)	3.75 (1.26)	4.13 (1.50)	3.80 (1.37)

表 3-2. 敵意:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.28 (1.14)	4.42 (1.36)	3.82 (1.47)	4.17 (1.34)
通常状況条件	3.22 (1.20)	3.87 (1.05)	4.31 (1.34)	3.82 (1.22)

表 3-3. 自己支配:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.55 (1.66)	5.10 (1.35)	4.21 (1.73)	4.61 (1.62)
通常状況条件	3.26 (1.91)	4.33 (1.35)	5.09 (1.59)	4.25 (1.68)

表 3-4. 自由の行使:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.45 (1.45)	5.18 (1.15)	4.55 (1.67)	4.72 (1.46)
通常状況条件	3.85 (1.52)	3.83 (1.43)	4.22 (1.88)	3.93 (1.56)

表 3-5. 攻撃:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	3.76 (1.32)	3.66 (1.44)	2.76 (1.55)	3.39 (1.49)
通常状況条件	2.46 (1.14)	3.09 (1.15)	2.54 (1.23)	2.79 (1.19)

表 3-6. 主観的反応:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.25 (0.96)	4.45 (1.00)	4.02 (1.07)	4.23 (1.02)
通常状況条件	3.31 (0.94)	3.90 (0.93)	4.36 (1.14)	3.87 (1.05)

表 3-7. 自由回復行動:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	4.11 (1.09)	4.42 (0.87)	3.65 (1.27)	4.05 (1.13)
通常状況条件	3.15 (1.08)	3.46 (1.12)	3.38 (1.37)	3.36 (1.17)

表 5. 女性への共感:平均 (標準偏差)

ナルシズム状況	ナルシズム特性			全体
	低群	中群	高群	
ナルシスティック状況条件	5.05 (1.10)	5.22 (0.85)	4.77 (1.31)	5.01 (1.11)
通常状況条件	4.74 (0.96)	4.88 (0.80)	4.79 (0.97)	4.82 (0.88)

考 察

本研究は、ナルシスティックリアクタンス理論におけるナルシズム特性とナルシズム状況が、性的強要に及ぼす影響を調べ、理論の有効性を検討することを目的として行った。

1. 仮説1の検証

(1) ナルシズム状況の効果

リアクタンスに関する従属変数のうち敵意、自由の行使意図、攻撃意図、主観的反応、自由回復行動意図でナルシズム状況の主効果が有意となり、禁止された行動の魅力と自己支配感でもナルシズム状況の主効果が有意傾向を示した。すなわち、すべてのリアクタンス関連変数において、ナルシスティック状況条件の方が通常状況条件よりも得点が高いという一貫した結果が得られた。これにより、男性が女性からセックスを拒否されたとき、その男性がナルシスティック状況にある場合には、リアクタンスを喚起しやすいことが示された。ナルシズム状況がリアクタンスに及ぼすそうした効果は仮説1と方向的に一致する。

(2) ナルシズム特性の効果

ナルシズム特性の主効果は、自己支配感と攻撃意図において有意となった。しかし、自己支配感に関しては、ナルシズム特性3群間の差はいずれも有意な水準に達しなかった。攻撃意図に関しては、ナルシズム特性中群の方が高群より攻撃意図得点が高いという、仮説1とは方向的に矛盾する結果が得られた。しかし、攻撃意図得点は全体的に低く、女性に対する攻撃的な行動意図は、他の反応に比べると全体的に低いことが判明した。また、攻撃意図に関するナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用は有意傾向にとどまっていた。

(3) ナルシズム状況とナルシズム特性の交互作用

ナルシズム状況×ナルシズム特性の交互作用は、敵意、自己支配感、主観的反応に関して有

表4. 各従属変数の2要因分散分析の結果

	ナルシシズム状況		ナルシシズム特性		ナルシシズム状況×ナルシシズム特性	
	主効果 F(1,183)	通<N	主効果 F(2,183)	多重比較	交互作用 F(2,183)	単純主効果 F(1,183)
リアクタンス						
禁止された行動の魅力	3.78 [†]	通<N	1.77		0.07	
敵意	3.99*	通<N	1.64		5.52**	通:4.49* N:2.06 低:9.86** 中:3.57 [†] 高:2.12 通:低<高* 中:通<N [†]
自己支配	2.77 [†]	通<N	4.69*	低<中 [†]	7.04**	通:7.79** N:2.55 [†] 低:88.96** 中:4.41* 高:4.16* 通:低<中* 高:N:高<中 [†] 低:通<N** 中:通<N* 高:N<通*
自由の行使	11.40**	通<N	0.85		2.01	
攻撃	12.55**	通<N	4.76*	高<中* 高<低 [†]	2.43 [†]	通:2.32 N:5.78** 低:13.29** 中:3.54 [†] 高:0.36 N:高<低** 高<中* 低:通<N** 中:通<N [†]
主観的反応	6.47*	通<N	3.05 [†]		5.99**	通:6.43** N:1.50 低:11.97** 中:5.62* 高:1.65 通:低<高** 低<中 [†] 低:通<N** 中:通<N*
自由回復行動	18.39**	通<N	2.41 [†]		1.75	
女性への共感	1.98		1.10		0.58	

注1) **p<0.01, *p<0.05, [†]p<0.10

注2) 表中の“N”はナルシシズムテスト状況条件を, “通”は通常状況条件を, “低”はナルシシズム特性低群を, “中”は中群を, “高”は高群を表す。

意であった。敵意、自己支配感、主観的反応のいずれに関しても、通常状況条件では、ナルシズム特性高群の方が低群よりも得点は高かった。これにより、男性が通常状況にある場合には、ナルシズム特性の高い男性ほど、女性からのセックスの拒否に対してリアクタンスを喚起しやすいことが示された。通常状況においてナルシズム特性がリアクタンスに及ぼすそうした効果は仮説 1 と方向的に一致する。

敵意、自己支配感、主観的反応のいずれに関しても、ナルシズム特性低群では、ナルシシスティック状況条件の方が通常状況条件よりも得点は高かった。これにより、ナルシズム特性が低い男性の場合には、その男性がナルシシスティック状況にある方が、女性からのセックスの拒否に対してリアクタンスを喚起しやすいことが示された。ナルシズム特性低群においてナルシズム状況がリアクタンスに及ぼすそうした効果は仮説 1 と方向的に一致する。

自己支配感と主観的反応に関して、ナルシズム特性中群では、ナルシシスティック状況条件の方が通常状況条件よりも得点が高かった。これにより、男性のナルシズム特性が中程度の場合には、その男性がナルシシスティック状況にある方が、女性からのセックスの拒否に対してリアクタンスを喚起しやすいことが示された。こうした結果も仮説 1 と方向的に一致する。

自己支配感に関して、ナルシズム特性高群では、通常状況条件の方がナルシシスティック状況条件よりも得点は高く、仮説 1 と方向的に矛盾する結果が得られた。しかし、ナルシズム特性低群では 3 つの従属変数で、中群では 2 つの従属変数で、ナルシズム状況の効果が見られるのに比べ、高群では 1 つの従属変数のみでナルシズム状況の効果が見られた。ナルシズム特性の高い男性の場合には、ナルシズム状況の影響を受けにくいのかかもしれない。

(4) 本研究で得られた知見のまとめ

以上の結果をまとめると、仕事や学業などがいつも通りで、恋愛にも特にのぼせあがっておらず、アルコールにも酔っていないような通常状況のときには、男性は、女性からセックスを拒否されても、リアクタンスは喚起されにくい。しかし、成功し、恋愛にのぼせあがっており、アルコールに酔っているようなナルシシスティック状況のときには、男性は、女性からセックスを拒否されるとリアクタンスを喚起しやすいことが示され、仮説 1 は方向的に支持された。

しかし、ナルシズム特性に関しては、この要因単独ではあまり効果が見られず、ナルシズム状況と組み合わせられたときに、独特な効果が出現した。ナルシズム特性が低い男性は、状況に左右されやすく、通常状況では、女性からセックスを拒否されてもリアクタンスは喚起されないが、ナルシシスティックな状況では、女性からセックスを拒否されるとリアクタンスを喚起されやすいことが示された。一方、ナルシズム特性が高い男性は、状況の影響を受けにくいにもかかわらず、一部のリアクタンス測度に関して通常状況の方でリアクタンスが喚起されやすいことが示された。前者の結果は仮説 1 と方向的に一致するが、後者の結果は仮説 1 と方向的に矛盾する。

(5) 仮説 1 の支持の程度

ナルシズム状況の効果は仮説 1 を支持する方向であったが、ナルシズム特性の効果は仮説 1 を指示しない方向のものを含んでいた。そして、通常状況でナルシズム特性が低い場合に、リアクタンスが最も喚起されにくいという仮説 1 の一部は支持された。しかし、ナルシシスティック状

況でナルシズム特性が高い場合に、リアクタンスが最も喚起されやすいという仮説 1 の一部は支持されなかった。これは、ナルシスティック状況におけるナルシズム特性の効果が不明瞭であったことが原因であろう。しかし、本研究ではナルシズム状況とナルシズム特性がリアクタンス喚起に影響を与えることを実証することができたので、ナルシスティックリアクタンス理論の有効性をある程度証明できたと言えるであろう。

2. 仮説 2 の検証

女性への共感に関しては、全体的に得点が高く、どの群または条件でも女性に共感的な結果となっており、ナルシズム特性の効果も、ナルシズム状況の効果も見出せず、仮説 2 は支持されなかった。Bushman et al. (2003) では、ナルシズム特性が高い男性の場合、女性に対して共感的でないという結果が、逆に、山香・深田 (2006) では、ナルシスティック状況条件下の男性の方が女性に対して共感的であるという結果が報告された。本研究では、女性への共感得点が高かったため、天井効果が働き、ナルシズム特性とナルシズム状況の効果が出現しなかったのかもしれない。

3. 今後の課題

本研究では、ナルシズム状況が、男性のリアクタンスに影響を与えることが示された。しかし、このナルシズム状況には、職業的成功と、恋愛におけるのぼせあがり、アルコールによる酔いの 3 つの要素が含まれている。そのため、この 3 つの要素の全てがリアクタンスに影響を与えているのか、どれか 1 つの要素が特に影響を与えているのかは不明である。よって今後、これらのうちのどの要素が最もリアクタンスに影響する要素であるかを明らかにする必要がある。どの要素が性的強要に伴う男性側のリアクタンスを引き起こしやすいかを解明することができれば、男性も女性も性的強要事態の発生を回避することが可能となるであろう。

また、本研究では取り上げなかったリアクタンス喚起に直接影響する要因を検討の対象とすることによって、ナルシズムに関係する要因との交互作用の可能性を探ることも必要であろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV.
- (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) (1995). DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院)
- Baumeister, R. F., Catanese, K. R., & Wallace, H.M (2002). Conquest by force: A narcissistic reactance theory of rape and sexual coercion. *Review of General Psychology*, 6(1), 92-135.
- Brehm, J. W. (1966). *A theory of psychological reactance*. New York: Academic Press.
- Bushman, B. J., Bonacci, A. M., van Dijk, M., & Baumeister, R. F. (2003). Narcissism, sexual refusal, and aggression: Testing a narcissistic reactance model of sexual coercion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1027-1040.
- 今城周造 (2002). 説得への反発: 心理的リアクタンス理論 深田博己(編著) 説得心理学ハンドブ

ック—説得コミュニケーション研究の最前線— 北大路書房 pp.329-371.

小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.

山香玲子・深田博己 (2006). ナルシシスティックリアクタンス理論の検討 広島大学心理学研究, 6, 103-121.

補助資料

【ナルシスティック状況条件】

Aくんは大学3年生です。

Aくんは最近、部活でも学業でも良い成績をとりました。まわりの友達と比べてもたいへん良い成績で、友達から賞賛され、自分はとても能力の高い、価値のある人間だと感じています。

またAくんには付き合っ1ヶ月になり、セックスもするBさんという恋人がいます。Aくんは恋人ができたということで舞い上がっており、自分がとても魅力的な人間になったと感じ、そしてBさんの気持ちを考えずに自分の要求を押し付けてしまうこともあります。

今日はそのBさんとデートの日です。前から観たかった映画を観たり、買い物をしたり、とても楽しい時間を過ごしました。そして夕食ではおいしい料理を食べ、二人ともとても満足しました。その夕食の席で、Aくんだけはお酒を飲み、ほろ酔いの状態になっています。夕食も食べ終わったデートの帰りに、二人はAくんの部屋で過ごすことにしました。

Aくんの部屋で、Bさんはコーヒーを飲み、Aくんはさらにビールやワインなどのお酒を飲みながら、色々なことを話すうち、Aくんはかなり酔ってきたようです。

そのうち、Aくんはとても良い雰囲気になったと感じたのでBさんにキスをしました。Bさんもキスに応じてくれたため、Aくんはセックスをしたくなり、Bさんの身体に触り始めました。しかしBさんには「やめて」と拒否されてしまいました。Aくんは、拒否されたものの、このまま続けていれば今に気が変わるかもしれないと思い、そのまま行為を続けました。

Aくんはそのまま行為を続けていたのですが、Bさんは拒否をし続け、拒否の口調も強くなってきます

...

【通常状況条件】

Aくんは大学3年生です。

Aくんは最近、部活でも学業でもいつも通りの成績をとりました。まわりの友達と比べても良くも悪くもない成績で、自分は平均的な能力の平凡な人間だと感じています。

またAくんには付き合っ1ヶ月になり、セックスもするBさんという恋人がいます。この恋人とは、周囲の大学生同士のカップルと同じような付き合いをしています。

今日はそのBさんとデートの日です。前から観たかった映画を観たり、買い物をしたり、とても楽しい時間を過ごしました。そして夕食ではおいしい料理を食べ、二人ともとても満足しました。夕食も食べ終わったデートの帰りに、二人はAくんの部屋で過ごすことにしました。

Aくんの部屋では、二人でコーヒーを飲みながら、色々なことを話しました。

そのうち、Aくんはとても良い雰囲気になったと感じたのでBさんにキスをしました。Bさんもキスに応じてくれたため、Aくんはセックスをしたくなり、Bさんの身体に触り始めました。しかしBさんには「やめて」と拒否されてしまいました。Aくんは、拒否されたものの、このまま続けていれば今に気が変わるかもしれないと思い、そのまま行為を続けました。

Aくんはそのまま行為を続けていたのですが、Bさんは拒否をし続け、拒否の口調も強くなってきます

...